

定本 織田作之助全集

第六卷

定本
織田作之助全集
第六卷

文泉堂書店

定本 織田作之助全集 第六卷

〔日本文学全集・選集叢刊第6次〕

昭和五十一年四月二十五日発行

著者 織田作之助

発行者 谷地秀祐

印刷所 (株)平河工業社

製本所 (財)印刷局朝陽会

発行所 文泉堂書店

本店 東京都千代田区神田神保町二一四一六

電話 東京(03)二六五局八九八一番(代表)

出版部 東京都千代田区神田神保町一四九一

電話 東京(03)二六五局八九八三番
二九四局〇二五九番

(落丁・乱丁本はお取替いたします)

定本 織田作之助全集 第六卷 目次

競馬	九
鬼	二三
夫婦善哉後日	三三
四月馬鹿	五三
饗宴	六七
それでも私は行く	七三

夜光虫……………一八五

夜の構図……………二六七

掌編……………三三九

解説……………野坂昭如……………三五六

作品解題……………青山光二……………三六三

定本 織田作之助全集 第六卷

競

馬

朝からどんより曇っていたが、雨にはならず、低い雲が陰気に垂れた競馬場を黒い秋風が黒く走っていた。午後になると急に暗さが増して行つた。しぜん人も馬も重苦しい気持ちに沈んでしまふそうだったが、しかしふと通り魔が過ぎ去った跡のような虚しい慌しさにせき立てられるのは、こんな日は競馬が荒れて大穴が出るからだらうか。晩秋の黄昏がはや忍び寄つたような翳の中を焦躁の色を帯びた殺気がふと行き交っていた。

第四角まで後方の馬ごみに包まれて、黒地に白い銭形紋散らしの騎手の服も見えず、その馬に投票していた少数の者も殆んど諦めかけていたような馬が、最後の直線コースにかかると急に馬ごみの中から抜け出してぐいぐい伸びて行く。鞭は持たず、伏せをしたように頭を低めて、馬の背中にびたりと体をつけたまま、手綱をしゃくっている騎手の服の不気味な黒と馬の胴につけた数字の1がぱっと観衆の眼にはいり、1か7か9か6かと眼を凝らした途端、はやゴール直前で白い息を吐いている先頭の馬に並び、はげしく競り合った挙句、僅かに鼻だけ抜いて単勝二百円の大穴だ。そして次の障碍競走では、人気馬が三頭も同じ障碍で重なるように落馬し、騎手がその場で絶命するという

騒ぎの隙をねらつて、腐り厩舎の腐り馬と嘸われていた馬が見習騎手の鞭にベタバタ尻をしばかれながらゴールインして単復二百円の配当、馬主も騎手も諦めて単式はほかの馬に投票していたという話が伝えられるくらいに番狂わせである。

そんな競走が続くと、もう誰もかれも得体の知れぬ魔に憑かれたように馬券の買い方が乱れて来る。前の晩自宅で血統や調教タイムを綿密に調べ、出遅れや落馬癖の有無、騎手の上手下手、距離の適不適まで勘定に入れて、これならば絶対確実だと出馬表に赤鉛筆で印をつけて来たものも、場内を乱れ飛ぶニュースを耳にすると、途端に惑わされて印もつけて来なかつたような変挺な馬を買つてしまふ。朝、駅で売っている数種類の予想表を照らし合わせ、どの予想表にも太字で挙げている本命（力量、人気共に第一位の馬）だけを、三着まで配当のある確実な複式で買うという小心な堅実主義の男が、走るのは畜生だし、乗るのは他人だし、本命といつても自分の儘になるものか、もう競馬はやめたと予想表は尻に敷いて芝生にちょんぼりと坐り、残りの競走は見送る肚を決めたのに、競走場へ現れた馬の中に脱糞をした馬がいるのを見つけると、あの糞の柔さはただごとでない、昂奮劑のせいだ、あの馬は今日はやるらしいと、慌てて馬券の売場へ駆け出して行く。三番片脚乗らんか、三番片脚乗らんかと呶鳴っている男は、今しがた厩舎の者らしい風体の男が三番の馬券を買って行つた

のを見たのだ。三番といえはまるで勝負にならぬ位貧弱な馬で、まさかこれが穴になるとは思えなかったが、やはりその男の風体が気になると、いって二十円損をするのも莫迦らしく、馬の片脚五円宛出し合せて四人で一枚の馬券を買い仲間を探しているのだった。あの男はこの競走は穴が出そうだと、厩舎のニュースを訊き廻ったが、訊く度に違う馬を教えられて迷いに迷い、挽馬場と馬券の売場の間をうろちる行ったり来たりして半泣きになった挙句、血走った眼を閉じて鉛筆の先で出馬表を突くと、七番に当たったのでラッキーセブンだと喜び、売場へ駆けつけて行く途中、知人に会い、何番にするのかと訊けば、五番だという。そうか、やはり五番がいいかねと、五番の馬がスタートでひどく出遅れる癖があるのを忘れて、それを買ってしまうのだ。——人々はもはや耳かきですくう程の理性すら無くしてしまい、場内を黒く走る風にふと寒々と吹かれて右往左往する表情は、何か狂気じみていた。

寺田はしかしそんなあたりの空気にひとり超然として、惑いも迷いもせず、朝の最初の競走から1の番号の馬ばかり買いつづけていた。挽馬場の気配も見ず、予想表も持たず、ニュースも聴かず、一つの競走が済んで次の競走の馬券発売の窓口がコトリと木の音を立ててあくど、何のためらいもなく誰よりも先きに、一番！と手をさし込むのだった。

何番が売れているのかと、人気を調べるために窓口へ寄

っていた人々は、余裕綽々とした寺田の買い方にふと小憎らしくなった顔を見上げるのだったが、そんな時寺田の眼は苛々と燃えて急に挑み掛るようだった。何かしら思い詰めているのか放心して仮面のような虚しさに蒼ざめていた顔が、瞬間カッと血の色を泛べて、ただごとでない激しさであった。

迷いもせず一途に1の数字を追うて行く買い方は、行き当りばったりに思案を変えて行く人々の狂気を遠くはなれていたわけだが、しかし取り乱さぬその冷静さがかえって普通でなく、度の過ぎた潔癖症の果てが狂気に通ずるように、頑なその一途さはふと常規を外れていたかも知れない。寺田が1の数字を追いつけたのも、実はなくなった細君が一代という名であったからだ。

寺田は細君の生きている間競馬場へ足を向けたことは一度もなかった。寺田は京都生れで、中学校も京都A中、高等学校も三高、京都帝大の史学科を出ると母校のA中の歴史の教師になったという男にあり勝ちな、小心な律儀者で、病毒に感染することを惧れたのと遊興費が惜しくて、宮川町へも祇園へも行ったことがないというくらいだから、まして教師の分際で競馬遊びなど出来るような男ではなかった、といってしまうは簡単だが、ただそれだけではなかった。

寺田の細君は本名の一代という名で交潤社の女給をして

いた。交潤社は四条通と木屋町通の角にある地下室の酒場で、撮影所の連中や贅沢な学生達が行く、京都ではまず高級な酒場だったし、然も一代はそのナンバーワンだったから、寺田のような風采の上らぬ律儀者の中学教師が一代を細君にしたと聴いて、驚かぬ者はなかった。尤も一代の方では寺田の野暮な生真面目さを見込んだのかも知れない。もともと酒場遊びなぞする男ではなかったのだが、ある夜同僚に無理矢理誘われて行き、割前勘定になるかも知れないとひやひやしながら、おずおずと黒ビールを飲んでいる寺田の横に坐った時、一代は気が詰りそうになった。ところが、翌る日から寺田は毎夜一代を目当てに通って来た。置いて行く祝儀もすくなく、一代は相手にしなかったが、十日目の夜だしぬけに結婚してくれと言う。隣のボックスにいる撮影所の助監督に秋波を送りながら、いい加減に聴き流していたが、それから一週間毎夜同じ言葉をくりかえされている内に、ふと寺田の一途さに心を惹かれた。二十八歳の今日まで女を知らずに来たという話もう冗談に思えず、十八の歳から体を濡らして来た一代にとつては、地道な結婚をするまたとない機会かも知れなかった。思えば自分ももう二十六、そろそろ身を堅めてもいい歳だろう。都ホテルや京都ホテルで嗅いだ男のポマードの匂いよりも、野暮天で糞真面目ゆえ「お寺さん」で通っている醜男の寺田に作ってやる味噌汁の匂いの方が、貧しかった実家の破れ障子をふと想い出させるような沁々した幼心の

なつかしさだと、一代も一皮剥けば古い女だった。風采は上らぬといえ帝大出だし笑えば白い歯ならびが清潔だと、そんなことも勘定に入れた。

ところが寺田の両親が反対した。「お寺さん」という绰名はそれと知らずにつけられたのだが、実は寺田の生家は代々堀川の仏具屋で、寺田の嫁も商売柄僧侶の娘を貰う積りだったのだ。反対された寺田は実家を飛び出すと、銀閣寺附近の西田町に家を借りて一代と世帯を構えた。寺田にしては随分思い切った大胆さで、それだけ一代にのぼせていたわけだったが、しかし勘定になった上にそのことが勤め先のA中に知れて免職になると、やはり寺田は蒼くなつた。交潤社の客で一代に通っていた中島某はA中の父兄会の役員だったのだ。寺田は素行不良の理由で免職になったことをまるで前科者になつてしまったように考え、もはや社会に容れられぬ人間になった気持で、就職口を探しに行こうとはせず、頭から蒲団をかぶって毎日ごろんごろんしていた。夜、一代の柔い胸の円みに触れたり、子供のよう

に吸ったりすることが唯一のたのしみで、律儀な小心者もふと破れかぶれの情痴めいた日々を送っていたが、一代ももともと夜の時間を奔放に送って来た女であった。肩や胸の幽形を愉しむようなマゾヒズムの傾向もあった、壁一重の隣家を憚って、蹴上の旅館へ寺田を連れて行ったりした。そんな旅館を一代が知っていたのかと寺田はふと嫉妬の血を燃やしたが、しかしそんな瞬間の想いは一代の魅力

ですぐ消えてしまった。

ある夜、一代は痛いと言ひ上った。驚いて口をはなし手で柔く押えると、それでも痛いという、血がにじんでも痛いと言わなかった女だったのに、妊娠したのかと乳首を見たが黒くもない。何もせぬのに夜通し痛がっていたので、乳腺炎になったのかと大病院へ行き、歯形が紫色ににじんている胸をさすがに恥しそうにひろげて診てもらうと、乳癌だった。未産婦で乳癌になるひとは珍らしいと、医者も不思議がっていた。入院して乳房を切り取って貰った。退院まで四十日も掛り、その後もレントゲンとラジウムを掛けに通ったので、教師をしていた間けちちと蓄めていた貯金もすっかり心細くなつてしまひ、寺田は大学時代の医師に泣きついて、史学雑誌の編輯の仕事を手話して貰った。ところが、一代は退院後二月許りたつとこんどは下腹の激痛を訴へ出した。寺田は夜通し撫でてやったが、痛みは消えず、しまひには油汗をタラタラ流して、痛い痛いと言ひ廻った。再発した癌が子宮へ廻っていたのだ。しかし医者は入院する必要はないと言う。ラジウムを掛けに通うだけでいいが、しかし通うのが苦痛で堪え切れないのなら、無理に通わなくてもいいという。その言葉の裏は、死の宣告だった。癌の再発は治らぬものとされているのだ。余り打たぬようにと、医者は寺田の手に鎮痛剤のロシパンを渡した。モルヒネが少量はいっているらしかった。死ぬときまつた人間ならもうモルヒネ中毒の惧れもない筈

だのに、あまり打たぬようにと注意するところを見れば、万に一つ治る奇蹟があるのだろうか、寺田は希望を捨てず、日頃けちくさい男だのに新聞広告で見た高価な短波治療機を取り寄せたり、枇杷の葉療法法の機械を神戸まで買いに行ったりした。人から聴けば臍の緒も煎じ、午夢の種もいいと聴いて摺鉢でゴシゴシとつぶした。

しかし一代は衰弱する一方で、水の引くようにみるみる瘦せて行き、癌特有の堪え切れぬ悪臭はふと死のにおいであった。寺田はもはや恥も外聞も忘れて、腫物一切に御利益があると近所の人に聴いた生駒の石切まで一代の腰巻を持って行き、特等の祈禱をして貰った足で、南無石切大明神様、何卒御利益を以て哀れなる二十六歳の女の子宮癌を救い給えと、あらぬことを口走りながらお百度を踏んだ帰り、参詣道で灸のもぐさを買って来るのだった。それでも一代の激痛は収まらず、注射の切れた時の苦しみ方は生きながらの地獄であった。ロシパンがなくなつたと気がついて、派出看護婦が近くの医者まで貰いに走っている間、一代は下腹をかきむしるような手つきをしながら、唇を突き出し、ポロポロ涙を流して、のた打ち廻るのだ。世の中にこんな苦痛があったのかと、寺田もともにポロポロ涙を流して、おろおろ見ている。一代は急に、噛んで、噛んで！と叫んだ。下腹の苦痛を忘れるために肩を噛んで貰いたいのだらう。寺田はガブリと一代の肩にかぶりついた。かつては豊満な脂肪で柔かった肩も今は痛々しいくらい瘦せ

て、寺田は気が遠くなるほど悲しかったが、一代ももう寺田に肩を噛まれながら昔の喜びはなく、痛い痛い泣く声にも情痴の響きはなかった。やっと看護婦が帰って来たが、のろまな看護婦がアンブルを切ったり注射液を吸い上げたり、腕を消毒したりするのに手間取っているのを見ると、寺田は一代の苦痛を一秒でも早く和けてやりたさに、早く早くと自分も手伝ってやるのだった。

気の弱い寺田はもとも注射が嫌いで、というより、注射の針の中には悪魔の毒気が吹込まれていると信じている頑冥な婆さん以上に注射を怖れ、伝染病の予防注射の時など、針の先を見ただけで真蒼になって卒倒したこともあり、高等教育を受けた男に似合わぬと嗤われていたくらいだから、はじめの内看護婦が一代の腕をまくり上げただけで、もう隣の部屋へ逃げ込み、注射が終ってからおそるおそる出て来るというありさまであった。針という感覚だけで参ってしまうような弱い神経なのだ。ところが、痛の苦痛という感覚の前にはもうそんな神経もいつか図太くなつて来たのか、背に腹は代えられぬ注射の手伝いをしてる中に、次第に馴れて来て、しまいには夜中看護婦が眠っている間一代のうめき声を聴くと、寺田は見よう見真似の針を一代の腕に打ってやるのだった。

そんなある日、一代の名宛で速達の葉書が来た。看護婦が銭湯へ行った留守中で、寺田が受け取って見ると「明日午前十一時、淀競馬場一等館入口、去年と同じ場所待っ

ている。来い」と簡単な走り書きで、差出人の名はなかった。葉書一杯の筆太の字は男の手らしく、高飛車な文調は何れは一代を自由にしていた男に違いない。去年と同じ場所という葉書はふといやな聯想をさそい、競馬場からの帰り昂奮を新たにするために行ったのは、あの献上の旅館だろうかと、寺田は真蒼になった。一代に何人かの男があったことは薄々知っていたが、住所を教えていたところを見ればまだ関係が続いているのかと、感覚的にたまらなかった。寺田はその葉書を破って捨てると、血相を変えて病室へはいって行った。しかし、一代は油汗を流してのたち廻っていた。激痛の発作がはじまっていたのだ。寺田はあわててロンパンのアンブルを切って、注射器に吸い上げると、いつもの癖で針の先を上向けて、空気を外に出そうとしたが、何思ったのかふと手を停めると、じっと針の先を見つめていた。注射器の中には空気のガラン洞が出来ている。このまま静脈に刺してやろうかと、寺田は静脈へ空気を入れると命がないと言った看護婦の言葉を想い出し、狂暴に燃える眼で一代の腕を見た。が、一代の腕は皮膚がカサカサに乾いて動く垢がたまり、悲しいまでに細かった。この腕であの競馬の男の首を背中を腰を物狂おしく抱いたとは、もう寺田は思えなかった。はだけた寝巻から覗いている胸も手術の跡が醜く窪み、女の胸ではなかった。ふと眼を外らすと、寺田はもう上向けた注射器の底を押して、液を噴き上げていた。すると、嫉妬は空気と共に流れ出

し、安心した寺田は一代の腕のカサカサした皮をつまみ上げると、プスリと針を突き刺した。ぐっと肉の中まで入れて液を押すと、間もなく薬が効いて来たのか、一代はけろりと静かになり、死んだように眠ってしまったが、耳を済ませるとかすかな鼾はあった。

それから一週間たったある夕方、治療に使う枇杷の葉を看護婦と二人で切って籠に入れてみると、うしろから一寸と一代の聲がした。振り向くと、唇の間からたらんと舌を垂れ、ウオーウオーとけだもののような声を出して苦悶していた。驚いて看護婦が強心剤のアンブルを切って、消毒もせずに一代の腕に突き刺そうとしたが、肉が固くてはいらなかった。僕にやらせろと寺田が無理矢理突き刺そうとすると、針が折れた。一代の息は絶えていた。歳月がたつと、一代の想出も次第に薄れて行ったが、しかし折れた針の先のように嫉妬の想いだけは不思議に寺田の胸をチクチクと刺し、毎年春と秋競馬のシーズンが来ると、傷口がうずくようだった。競馬をする人間がすべて一代に関係があったように思われて、この嫉妬の激しさは寺田自身にも不思議なくらいであった。ところが、そんな寺田がふとしたことから競馬に癡りだしたのだから、人間というものはなかなか莫迦にならない。

寺田は一代が死んで間もなく史学雑誌の編輯をやめさせられた。看病に追われて怠けていた上、一代が死んだ当座ばかりとして半月も編輯所へ顔を見せなかったのだ。寺田

はまた旧師に泣きついて、美術雑誌の編輯の口を世話して貰った。編輯員の二人までが折柄始まった事変に召集されて、欠員があったのだ。こんどは怠けずこつこつと勤めて二年たつと、編輯長がまた召集されて、そのあとの椅子へついたその秋大阪に住んでいるある作家に随筆を頼むと、メ切の日に速達が来て、原稿は淀の競馬の初日に競馬場へ持って行くから、原稿料を持って淀まで来てくれという。

寺田はその速達の方がかつて一代に來た葉書の字とまるで違っていることに安心したが、しかし自分で行くのはさすがにいやだった。といって、ほかの者ではその作家の顔は判らない。私情で雑誌の発行を遅らせては済まない、寺田はやはり律儀者らしくいやや競馬場へ出掛けた。丁度一競走終ったところらしく、スタンドからぞろぞろと引き揚げて来る群衆の顔をこの中に一代の男がいる筈だとカッと睨みつけていると、やあ済まん済まん作家が寄って来て、君を探していたんだよ。どうやら朝からスリ続けて、寺田が持つて来る原稿料を当てにしていたらしかった。渡して原稿を貰い、帰ろうとしたが、僕も今日は京都へ廻るから終るまでつき合わないかと引き止められると、寺田はもう気が弱かった。スタンドに並んで作家の口から、君アソナカレーニナの競馬の場面読んだ？　しかしあれでもないよ、どうも競馬を本当に描写した文学はないね、競馬は女より面白いのにね、僕は競馬場へ女を連れて来る奴の気が知れんのだ、競馬があれば僕はもう女はいらんね、その